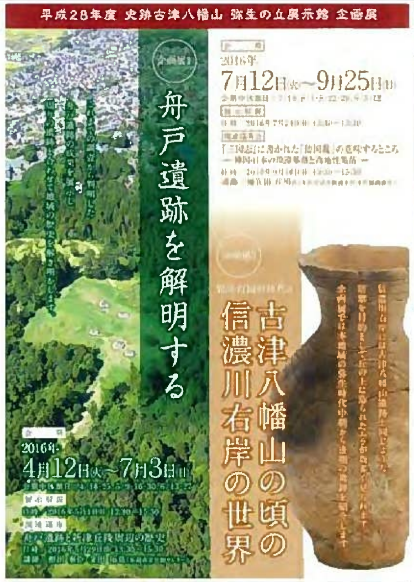
史跡古津八幡山　弥生の丘展示館　新潟市文化財センター　企画展２

天王山式土器からみた東日本の弥生社会

古津八幡山遺跡成立期の動向

- 201115　新潟市文化財センター
- 渡邊朋和



参考　古津八幡山　弥生の丘展示館で開催した関連企画展

- 2015年10～12月　邪馬台国の時代1
  北陸と会津を結んだ古津八幡山−東北南部（会津）の世界−
- 2016年1～3月　邪馬台国の時代2
  縄文のある弥生土器−新潟県北部（阿賀北）の世界−
- 2016年7～9月　邪馬台国の時代3
  古津八幡山の頃の信濃川右岸の世界
- 2017年1～3月　邪馬台国の時代4
  古津八幡山の頃の信濃川左岸の世界−六地山遺跡里帰り展−
- 2018年1～3月　邪馬台国の時代5
  柏崎・上越・頸城の世界
- 2018年12～4月　邪馬台国の時代6
  鉄−弥生・古墳時代の鉄器−
- 2019年11～3月　邪馬台国の時代7
  弥生時代後期の北越と北陸・長野との交流−天王山式土器から考える−
- 2020年9～12月　邪馬台国の時代8
  天王山式土器からみた東日本の弥生社会−古津八幡山遺跡成立期の動向−

◎今日の講演のあらすじ　1

① 古津八幡山遺跡では天王山式系列土器はあるが、中期後半の土器（会津系−川原町口式・北陸系−小松式・秋田系−宇津ノ台式など）は1点も出土していない！！

② 古津八幡山遺跡では竪穴住居や環濠などの遺構内で後期の北陸系土器と東北系土器（天王山式系列）が共伴している
⇒古津八幡山遺跡の調査成果から、天王山式系列土器の主体は後期に属すると考えられる

③ 白河市天王山遺跡の出現は、後期前半の後半段階（※後期初頭ではない）

④ 東日本では広範囲で中期後半（終末）～後期前半（初頭）の遺跡が少ない
⇒実態がよくわからない　研究をする際の最も大きな問題点

⑤ 中期終末の遺跡と後期初頭の遺跡は継続しない場合が多い⇒集落・遺跡の断絶がある

⑥ 後期前半（初頭）の天王山式系列土器には、中期後半（終末）の平行沈線文系土器の要素が認められる

⑦ 中期後半（終末）にあった地域差は、後期になると解消され、東北一円で「天王山式土器分布圏」に統一されたとする見解もあるが、後期にも明瞭な地域差がある
⇒「天王山式土器」として一括にすることは適当ではない

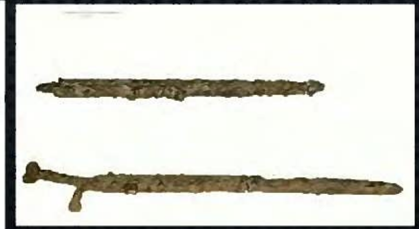
◎今日の講演のあらすじ　2

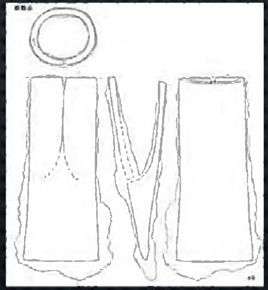
⑧　「天王山遺跡天王山式土器」成立以前の後期前半（初頭）に、それぞれの地域で前時期（中期後半）に系譜を辿れない似かよった文様が広域に認められる　（S字状連繋文）
⇒広域に人の往来があったことを窺わせる

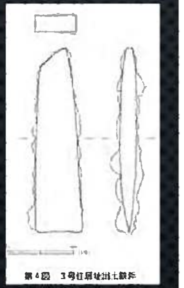
⑨　「天王山遺跡天王山式土器」で文様帯が確立する以前には系統・出自の異なる文様が一個体内（一文様帯内）に描かれる
⇒キメラ現象が顕著にみられる

⑩　北陸では東北北部・北海道南部から直接間接にもたらされたと考えられる土器がみられる
⇒日本海を介した直接的・間接的な交流がうかがえる

⑪　後期になると利器としての石器は、石鏃などに限られる
⇒石器の代わりに朝鮮半島で作られた鉄器が主に用いられた
⇒日本海の物流は朝鮮半島からの鉄器の流通を視野に入れる必要性がある







	時期	北陸	長野	古津八幡山遺跡	六地山遺跡	砂山遺跡	会津	中通り	東関東
	中期後半	戸水B式	栗林式	—		●	川原町口式 御山村下式		
紀元前後				—	△	●	油田Y		
	後期前半1	猫橋式	吉田式		六地山	●	和泉遺跡		東中根
	後期前半2	猫橋式	吉田式	外環濠C	六地山	●	能登遺跡		東中根
	後期前半3	猫橋式	吉田式	方形周溝墓１	○	●		天王山式古 天王山式新	東中根
	後期後半1	法仏式	箱清水式	方形周溝墓２				明戸遺跡	十王台
	後期後半2	法仏式	箱清水式	●					
	後期終末1			●					
	後期終末2			●					

0　プロローグ　1

『弥生人の船』大阪府立弥生文化博物館2013

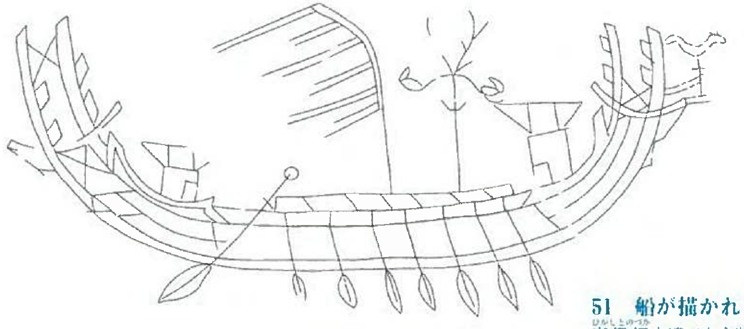
竪板型準構造船

準構造船が描かれた壷−日本海を船団が行き交っていた
竪板型1艘_櫂8−16人乗り？
貫型2艘？ 新潟市江南区道正遺跡（古墳時代前期）

貫型準構造船

49　船の埴輪

土師の里遺跡（大阪府藤井寺市）　大阪府立近つ飛鳥博物館蔵　古墳時代中期　長さ104.8cm

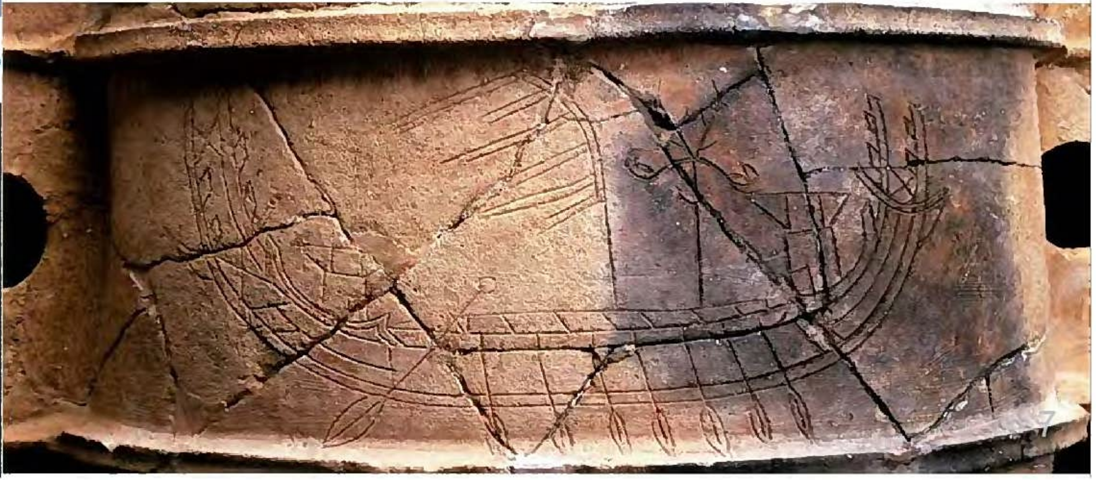


51　船が描かれた埴輪

東殿塚古墳（奈良県天理市）　天理市教育委員会蔵

古墳時代前期　高さ64.1cm

3隻の船の絵が描かれる。



『弥生人の船』大阪府立弥生文化博物館2013

０　プロローグ　２　天王山式土器を研究する目的 きっかけ

0_1_国指定史跡 古津八幡山遺跡の消長を明らかにする

時期・年代設定の基準になる土器編年が流動的（前後の時期が逆転する場合もありうる！！）

⇒時間軸が変わってしまうと、ストーリーが根本から崩れてしまう

0_2_越後平野の弥生時代のおける多（他）系統の土器群の共伴状況

・古津八幡山遺跡　３系統以上の土器群が共存　北陸系・東北系・折衷系

・六地山遺跡　多系統の土器群が共存　（新潟市石動遺跡・松影A遺跡なども）

・弥生土器の研究目的が、土器編年（地域ごとの変遷の尺度）の確立のためだけではなく、
時期ごとの土器の系統・系譜なども明らかにできる　⇒人の動きを明らかにする

0_3_北陸　富山県・石川県への資料調査

弥生の丘展示館の企画展の事前調査のために、2019年5月に富山県・石川県の資料調査に行った際に、「えっ！！新潟ではあまり見たことない変な土器だな？天王山式土器分布の外殻圏だから文様帯が変容しているのか？」と最初は思ったのだが、実は、そうではないことが後にわかった

0_４_六地山遺跡の再整理

0_５_恩師である磯崎正彦先生の業績

「天王山式土器の編年的位置に就いて」『上代文化』第26輯（國學院大學考古学会）1956.4

1　研究方法　1

1_1_研究対象時期

・弥生時代中期中頃～後期終末、古墳時代初頭
　天王山式土器前後の時期が研究対象

1_2_研究対象の特徴と制約

・研究対象とする時期は、遺跡そのものが少なく、完形土器も少ない
・破片資料までを研究対象としている（形になる土器だけを見ていてもわからない）
・前の時期（中期後半）との継続性が少ない？？　看過されて来た
・中期後半の地域性が解消され、所謂天王山式土器に画一化されたと考える研究者もいる

1_3_研究対象とする地域と、現在把握している遺跡数

北海道62、青森88、岩手147、宮城65、秋田38、山形52、福島213、茨城90、栃木、千葉
群馬、新潟213、富山36、石川40、福井　約1000遺跡を集成し、現在進行中・・・

1　研究方法　2

1_4_遺跡・遺物の集成作業

・報告書・論文など文献を見て、対象遺物が掲載されているかを調べる

・都道府県単位に遺跡管理番号を付けて、遺跡位置をグーグルアースプロに入れる（KMZ）

－地理感のない他県では極めて有効　県単位・県内のエリア単位で把握する

・土器図版をコピー・スキャンして、集成図を作成

⇒集成作業を行うことによって、地域を越えて類似する属性の把握が可能

・土器の時期・特徴・系統を入れた集成表を作成　縄文原体（R・L）の記録は必要不可欠

・資料調査に行き、写真撮影を行い、可能な限り実測図を作成する・・・単なる収集癖？

富山県・石川県・新潟県は9割以上調査済み、岩手県は8割程度、福島県・・・

1_5_型式学的研究、分布論的研究

・型式学　器形や文様の変化・変遷を追う　型式・系統毎の集成・・

・分布論

2　天王山遺跡　天王山式土器

2_1_天王山遺跡（福島県白河市）

阿武隈川の北側にある独立丘陵上（豆柄山）、比高80㍍

古代の官道に近接し、白河関と白河郡衙（関和久遺跡）の中間に位置する

2_2_天王山式土器の８つの特徴（山内清男・中村五郎・馬目順一・佐藤信行・石川日出志等）

①交互の刺突（文）−交互刺突文

②口縁の突起の発達：北方系

③受口状口縁の多用：東北南部系

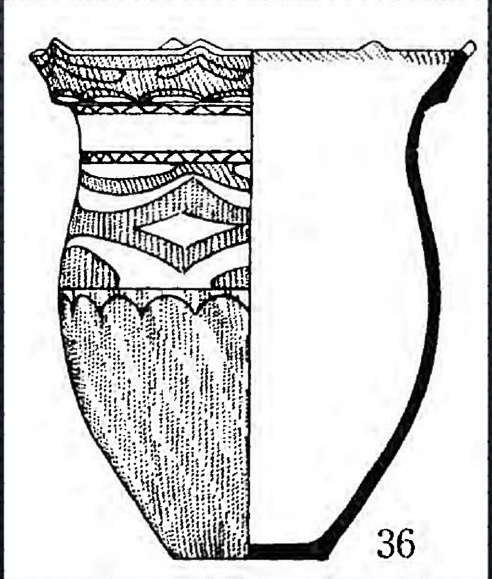
④頸部の一部の横帯状の素文化：東北南部系？

⑤体部文様帯の磨消縄文の発達：東北南部系？

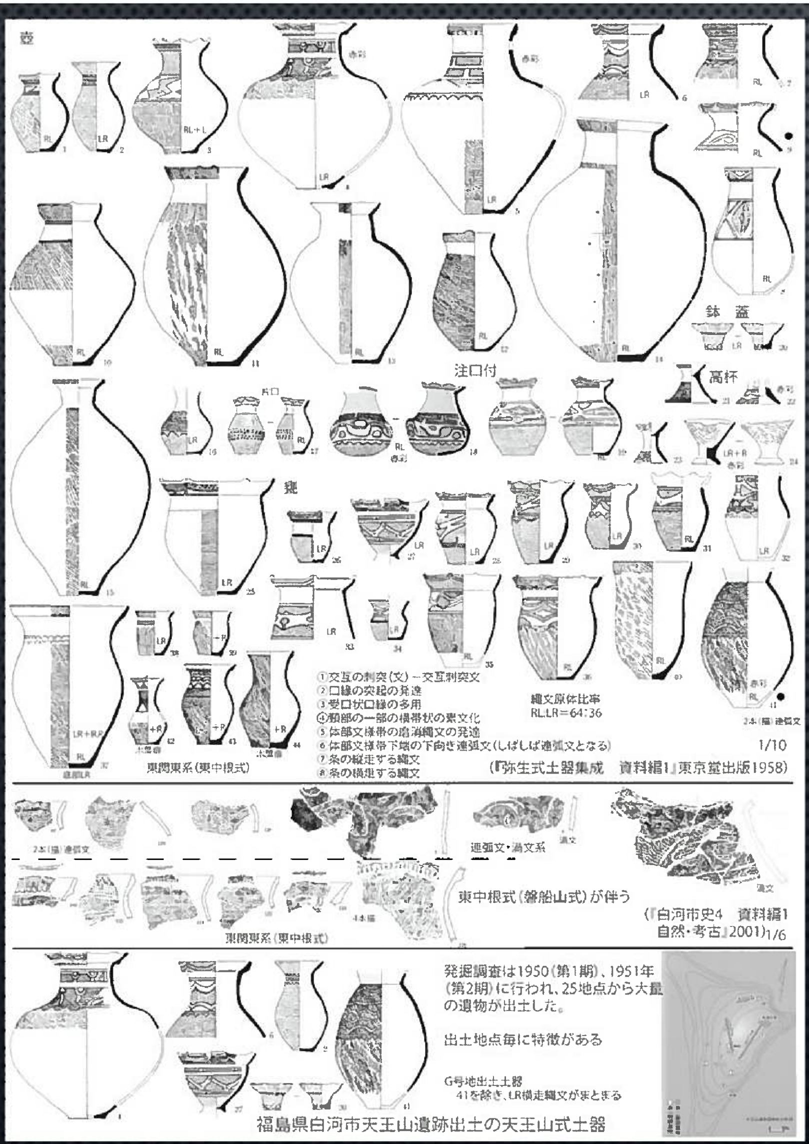
⑥体部文様帯下端の下向き弧線文（しばしば連弧文となる）：北方系

⑦条の縦走する縄文：RL　北方系

⑧条の横走する縄文：LR



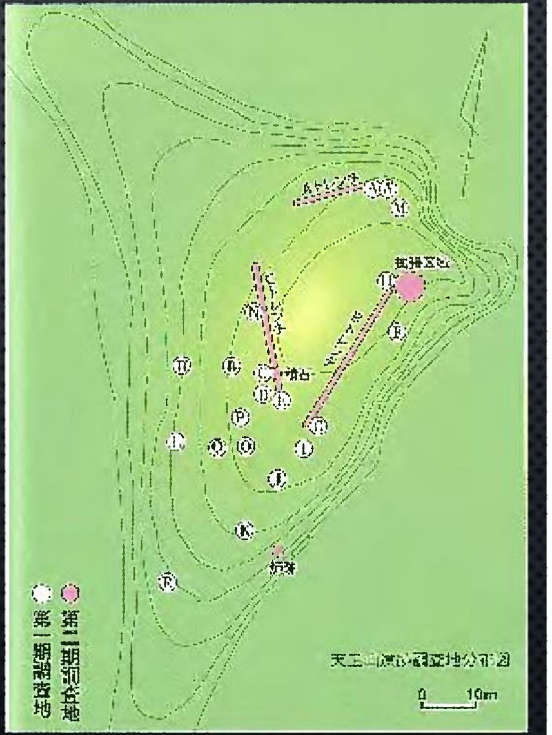
福島県白河市天王山遺跡

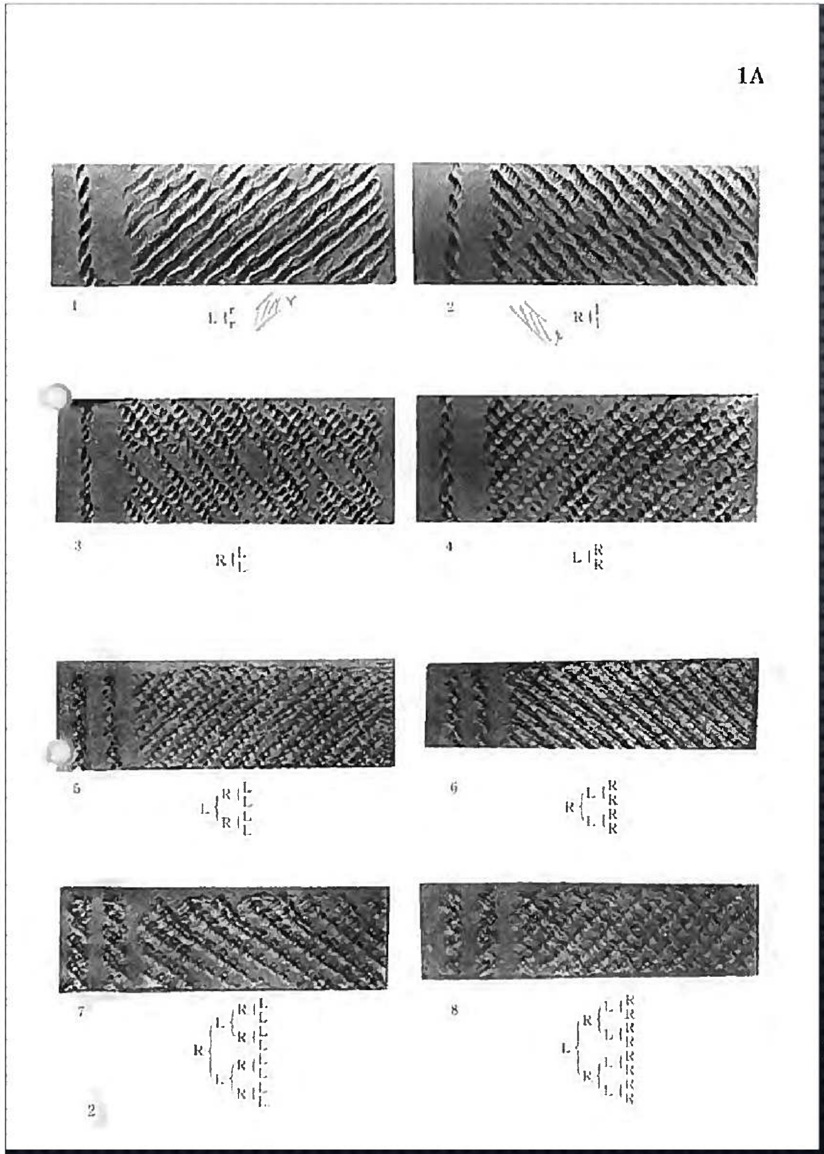


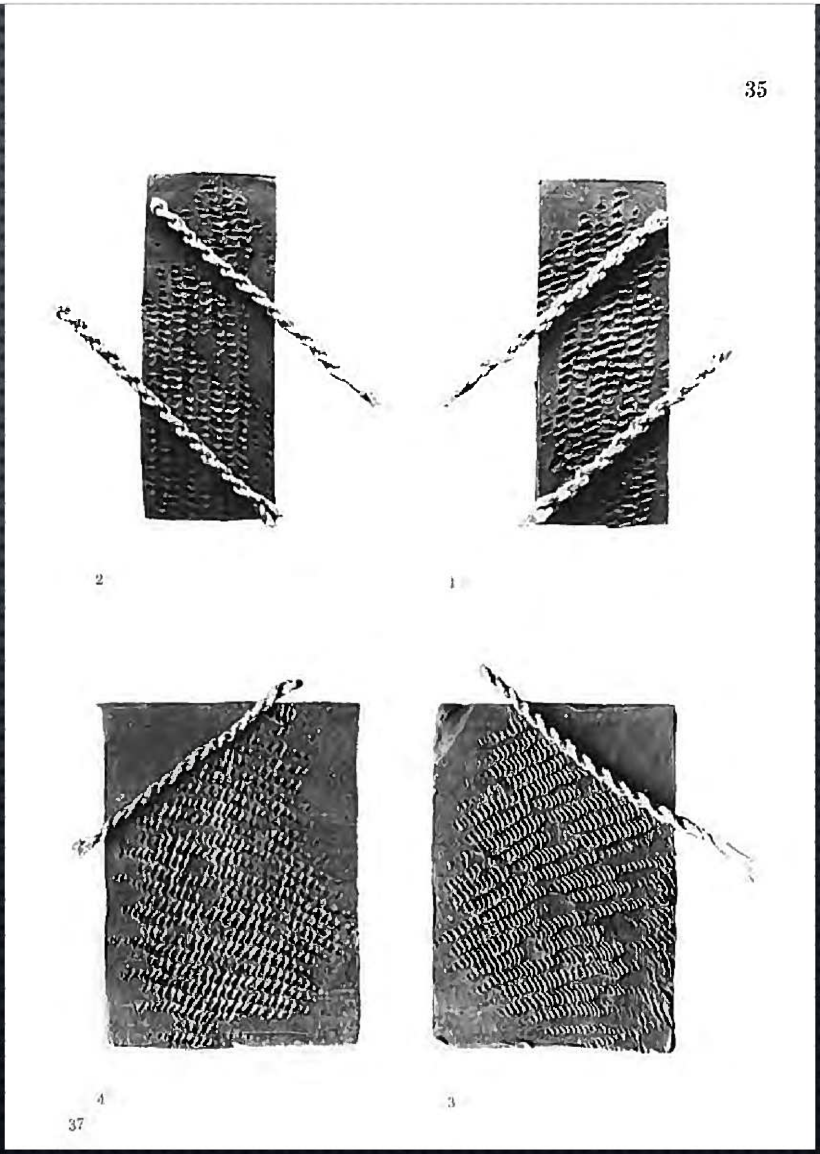
①交互の刺突（文）−交互刺突文
②口縁の突起の発達
③受口状口縁の多用
④頸部の一部の横帯状の素文化
⑤体部文様帯の磨消縄文の発達
⑥体部文様帯下端の下向き弧線文（しばしば連弧文となる）
⑦条の縦走する縄文　RL
⑧条の横走する縄文　LR

環状石器

アメリカ式石鏃



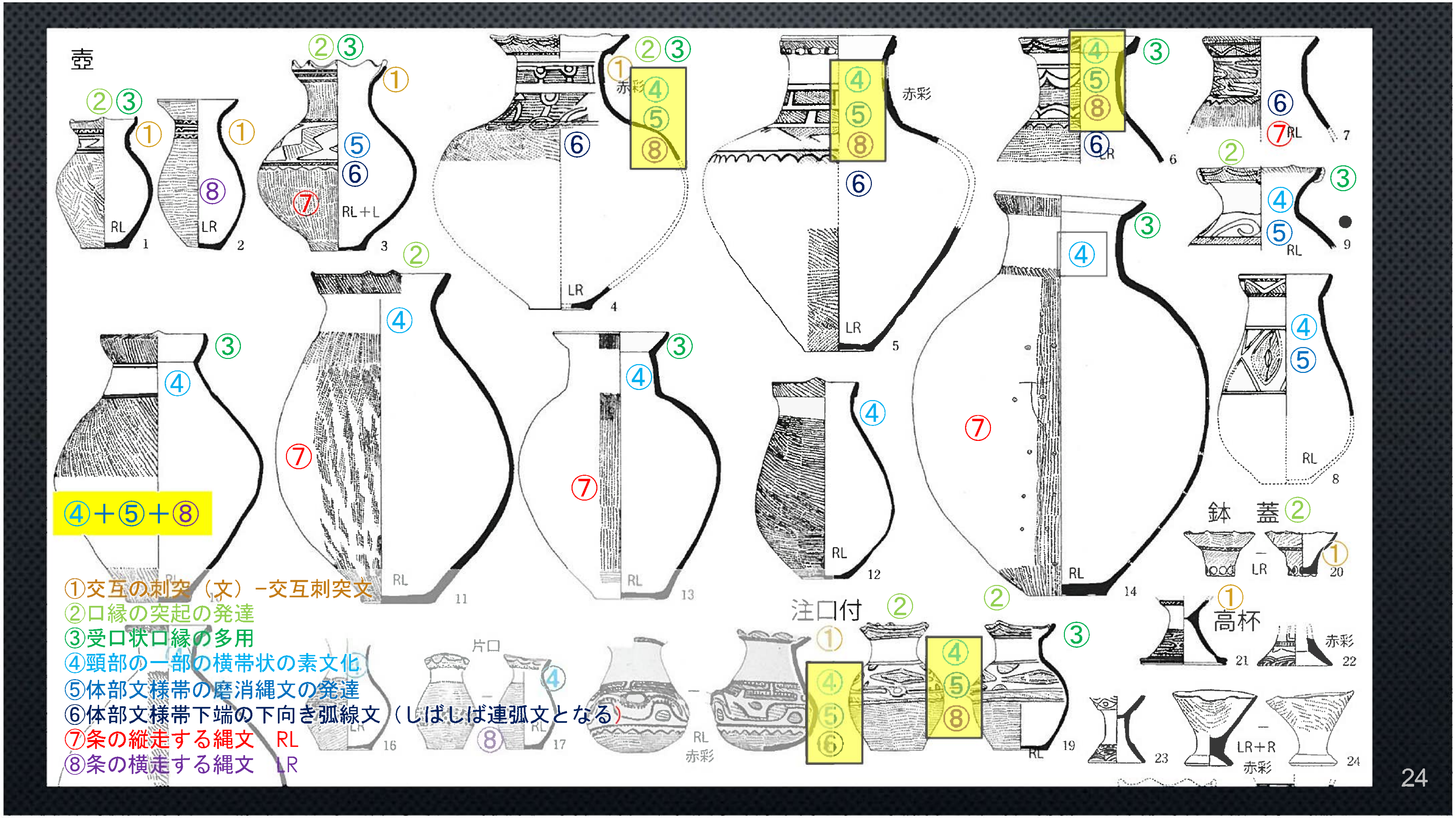




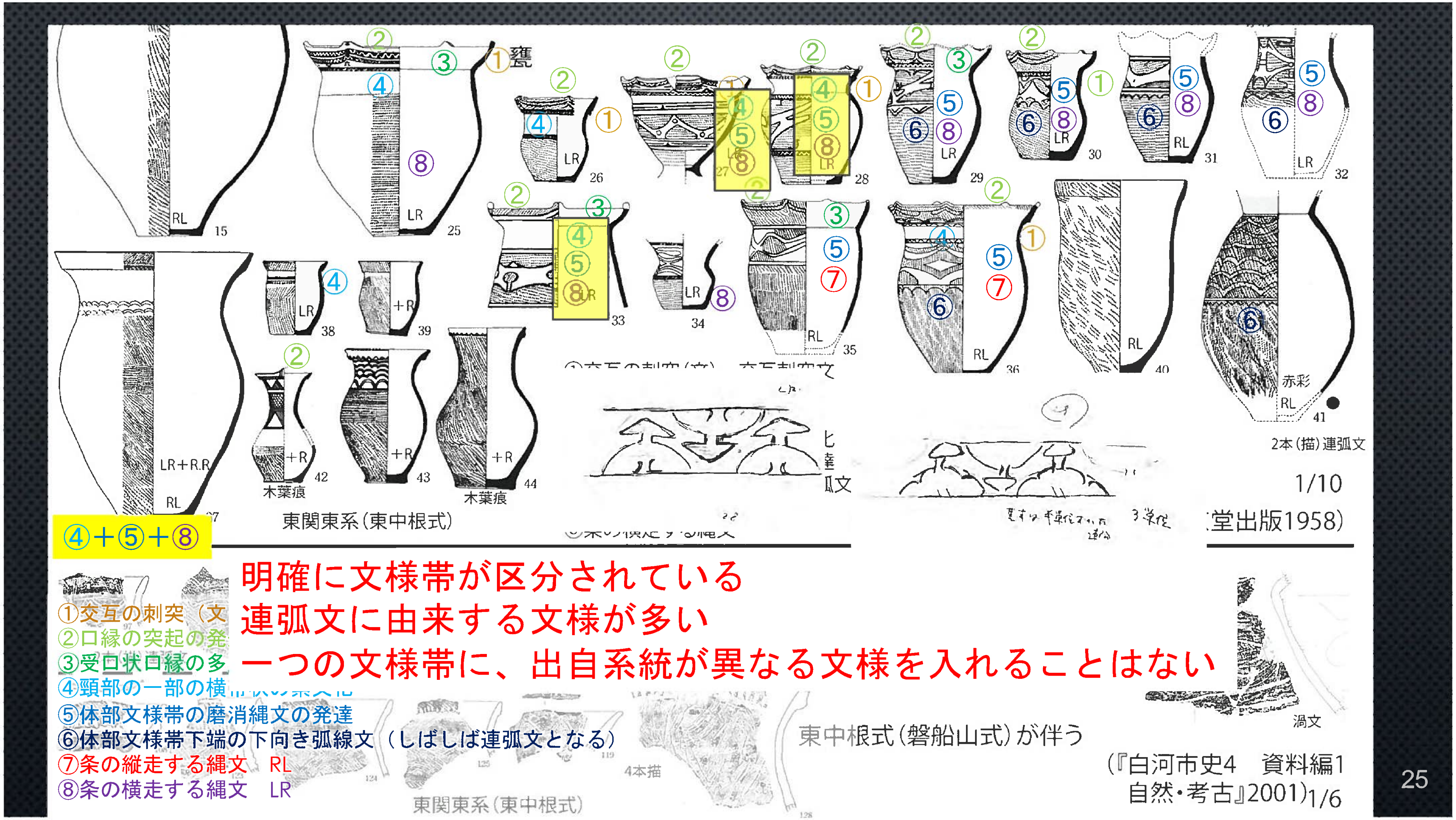
山内清男
『日本先史土器の縄紋』
（先史考古学会）1979

福島県白河市天王山遺跡
22

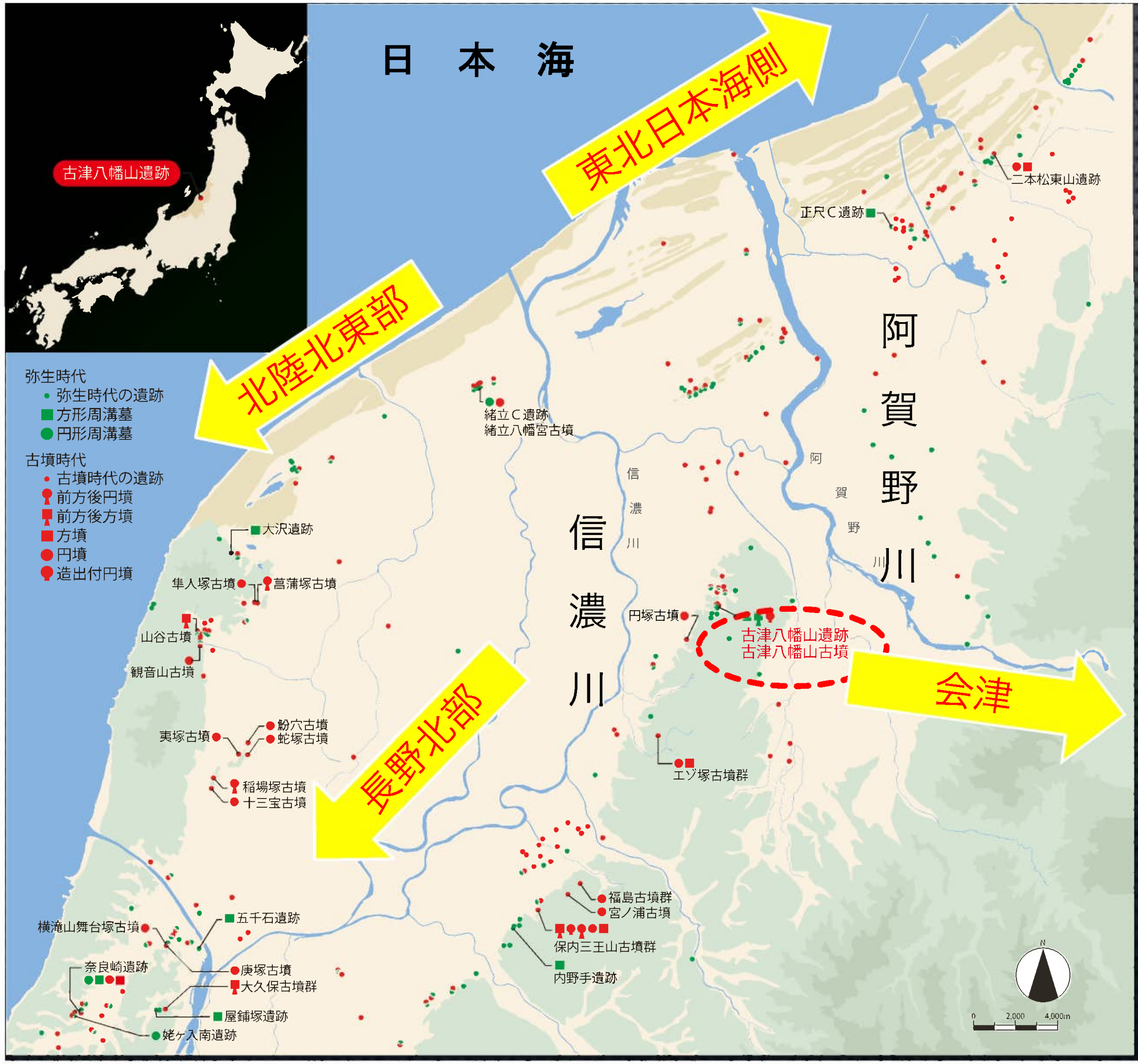
古相の土器
平行沈線で連弧文・渦文を描く
東関東系土器
・東関東では平行沈線文系
（２本描施文具）が新しくなると
多条化していく
・縄文原体は附加条第１種（＋R）
⇒共伴する東関東系土器は
後期初頭ではない！！
福島県白河市天王山遺跡
23



壺
鉢
蓋
注口付
高杯
片口
赤彩
④＋⑤＋⑧
①交互の刺突（文）−交互刺突文
②口縁の突起の発達
③受口状口縁の多用
④頸部の一部の横帯状の素文化
⑤体部文様帯の磨消縄文の発達
⑥体部文様帯下端の下向き弧線文（しばしば連弧文となる）
⑦条の縦走する縄文　RL
⑧条の横走する縄文　LR



④＋⑤＋⑧
明確に文様帯が区分されている
連弧文に由来する文様が多い
一つの文様帯に、出自系統が異なる文様を入れることはない
①交互の刺突（文
②口縁の突起の発
③受口状口縁の多
④頸部の一部の横
⑤体部文様帯の磨消縄文の発達
⑥体部文様帯下端の下向き弧線文（しばしば連弧文となる）
⑦条の縦走する縄文　RL
⑧条の横走する縄文　LR
東関東系（東中根式）
東中根式（磐船山式）が伴う
2本（描）連弧文
1/10
堂出版1958)
渦文
4本描
赤彩
木葉痕
（『白河市史4　資料編1
自然・考古』2001）1/6
25



3　古津八幡山遺跡

3_1_遺跡の概要

・遺跡の時期は、弥生時代後期～後期終末、古墳時代

・日本海・信濃川・阿賀野川が近接する交通の要衝

・平野部との比高約50mの丘陵上に環濠に囲まれた集落が広がる

・50棟以上の竪穴住居が検出されている

・遺構内で北陸系・東北系・在地系土器が共伴し、土器編年（他地域との併行関係）を構築する際の基準資料となっている

・集落廃絶後に、最高所に前方後方形周溝墓（墳墓）

・その後、新潟県内最大の直径60mの円墳が築かれる

・2005年に12㌶が国指定史跡となる

弥生時代後期の社会

古津八幡山遺跡では東北系・北陸系、両地方の特徴を併せ持った地元系の土器があります。それ以前の弥生時代前期・中期も新潟県内では同じような状況でした。日本海・信濃川・阿賀野川を利用して各地域の文化が伝わりました。これらの土器は、竪穴住居から一緒に見つかるので、ともに使われていたことがわかります。外来系は、古津八幡山へやって来た人々がつくったか、それらを真似て、つくられた土器です。

吹上遺跡（上越市）

上越市教育委員会　提供

篠ノ井遺跡群（長野市）

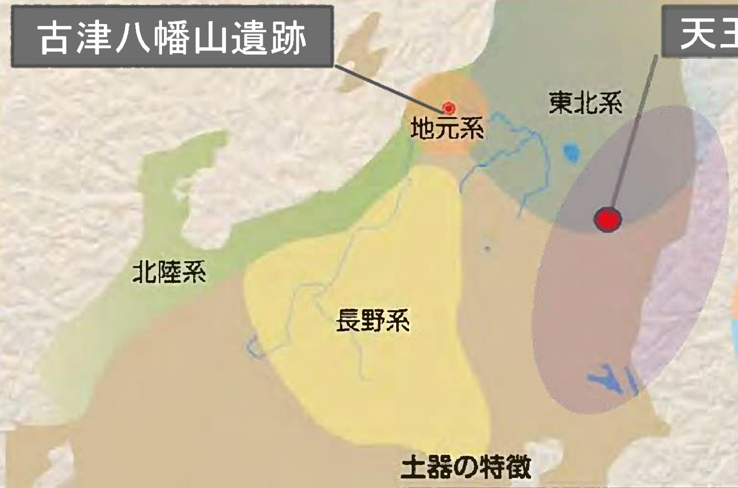
財団法人長野県埋蔵文化財センター　提供

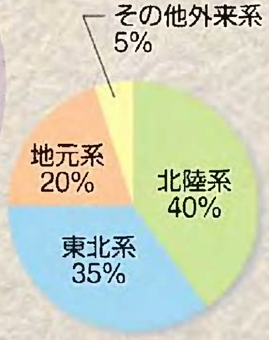
古津八幡山遺跡出土土器の系統別イメージ

古津八幡山遺跡 八幡山式土器

天王山遺跡（白河市）

白河市教育委員会　提供





土器の特徴

東北系	天王山式	縄文とヘラで描いた文様
北陸系	猫橋式・法仏式	薄板で土器の表面をなでる（ハケ目）
地元系	八幡山式	東北的な器形に北陸的なハケ目による整形手法
その他外来系	長野系（箱清水式）	櫛描文　赤い土器
	山陰系	

古津八幡山遺跡・天王山遺跡ともに、東北系土器（天王山式）の外郭圏－分布域外れ－に位置する点が重要

・中心規模
南北400m
東西150～200m